学会報告❸

第64回日本透析医学会学術集会・総会

「From Japan to World, From World to Japan 腎代替療法(Renal Replacement Therapy)は未来をめざす」をメインテーマに開催

2019年6月28日(金)～30日(日)、横浜市のパシフィコ横浜にて第64回日本透析医学会学術集会・総会が開催された。会長は、和歌山県立医科大学 腎臓内科学講座教授 重松 隆先生。今回のメインテーマは、「From Japan to World, From World to Japan 腎代替療法(Renal Replacement Therapy)は未来をめざす」。例年通り特別講演、シンポジウム、ワークショップ等多彩なプログラムが企画されたが、今回は特に6題という多くの招請講演があり、海外から多数の演者を招くとともに、アジア地域における交流を活発にするためアジアの透析医とのより緊密な人材交流の場を提供した。シンポジウムやワークショップでは実臨床の現場で問題になっているテーマに関して多方面からの視点で学習できる企画が目立った。また、若手医師・専門医育成のため、教育講演を充実させ、関連学会との共同企画はこれまでになく多数(10学会)に及んだ。

学会緊急企画1、2を開催

その他、学会緊急企画がまさしく急遽2つ企画された。学会緊急企画1は、「3月7日新聞報道に対する日本透析医学会の見解と対応」のテーマで行われた。日本透析医学会(JSDT)では、ある施設で起きた透析中止自己決定の問題における学会の立ち位置や見解について、2019年5月31日、学会ホームページに「日本透析医学会ステートメント」を発表している。本セッションでは、本問題の報道の経緯とJSDTの対応、本問題を受けて発足したJSDT調査委員会の調査結果や透析中断・非導入報道に関するJSDT倫理委員会の見解と対応、および今回のステートメント発表の経緯や目的等について報告があった。また、「人生の最終段階における維持透析の開始と継続に関する意思決定プロセスについてのガイドライン(案) 委員会」による提言改訂の方向性が示された。

学会緊急企画2は、「透析液排液の適正な処理について」のテーマで行われた。東京女子医科大学 臨床工学科 教授 峰島三千男先生が、「透析排液の実態と問題点について」、医療法人社団誠仁会みはま病院ME部 内野順司先生が、「適正な透析排水管理について」と題し、一連の透析排水問題の経緯や透析排水の現状、今後の対応等について報告を行った。本セッションは、学会3日目の早朝に3000人収容の第一会場で行われたにもかかわらず満席に近い聴衆が集まり、本問題の関心の高さを窺わせた。

⬆学会緊急企画2の会場風景(第1会場)

扶桑薬品工業株式会社共催 ランチョンセミナー27報告

学会2日目(2019年6月29日)、扶桑薬品工業株式会社共催ランチョンセミナー27が行われ、東邦大学医療センター大橋病院 腎臓内科 教授 常喜信彦先生の司会の下、大阪大学大学院医学系研究科 腎疾患臓器連関制御学 寄付講座准教授 濱野高行先生が「今後の透析液を考える」のテーマで講演を行った。

講演では、まず透析液のCa濃度について触れ、Ca濃度の高低によるビタミンDの投与量、薬剤選択の考え方の相違について考察し、低い透析液Ca濃度と高い透析液Ca濃度のそれぞれの利点、欠点について解説した。次に血中Mg濃度およびK濃度について触れ、透析液Mg濃度を上げることで、リン毒性が一部解除される可能性があること、高齢化の影響で透析患者の血中K濃度が年々低下していること等について解説した。さらに血中重炭酸濃度の上昇はオーバーアルカローシスを惹起する危険性があるので注意すべきと述べた。

⬆司会の常喜信彦先生

⬆演者の濱野高行先生

⬆セミナー会場風景

扶桑薬品工業株式会社/佐藤製薬株式会社共催 ランチョンセミナー33報告

学会3日目(2019年6月30日)には、扶桑薬品工業株式会社/佐藤製薬株式会社共催ランチョンセミナー33が行われ、医療法人あさお会 あさおクリニック 院長 前波輝彦先生の司会の下、金沢医科大学 腎臓内科学 講師 藤本圭司先生が「エムラクリームの内シャント穿刺痛緩和効果」のテーマで、また、医療法人社団一成会 たちばな台病院 鈴木志穂先生が「透析スタッフの視点から考えるVA管理～QOL向上に向けた課題と穿刺痛対策～」のテーマで講演を行った。

エムラクリームの内シャント穿刺痛緩和効果

藤本圭司先生は、金沢医科大学病院等国内6施設で実施した患者の内シャント穿刺痛緩和効果に関するリドカイン・プロピトカイン配合剤クリーム(以下クリーム)とリドカイン貼付剤(以下貼付剤)のランダム化比較試験の実施結果を報告した。アウトカムとして、内シャント穿刺痛、QOLの変化、使用薬剤の安全性を検討したところ、クリームは貼付剤よりも穿刺痛緩和効果が大きく治療効果において統計的有意差が認められた。また両薬剤の治療効果の差は臨床的意味を有する大きさである可能性が示唆されたが、SF-36(acute form)で測定したQOLの変化については両群間に統計的有意差は認められなかった。両薬剤とも副作用報告書により安全性が確認されたとのことであった。また、実臨床で役立つ臨床研究のあり方についても触れ、p値のみを論じるのではなく、臨床的有意差(意味のある差の大きさかどうか)についても検討を加える重要性を強調した。

透析スタッフの視点から考えるVA管理 ～QOL向上に向けた課題と穿刺痛対策～

鈴木志穂先生は、透析患者のQOLの維持と向上を目指すためのVA管理について以下の4つのポイントを挙げ、それぞれについて詳しく解説した。

1.VA入院管理は早期離床とリハビリが重要

例えば、1日の安静臥床によって筋肉量は0.5%減少し、2週間運動しないと高齢者は筋肉の1/4を失い、回復には3倍以上の期間が必要という。様々な手法を用いてHAD(入院関連機能障害)を予防することが重要という。

2.VAトラブルは早期発見・治療すべき

モニタリング・サーベイランスの必要性や治療結果のフィードバックの方法等を解説した。

3.VAの長期維持を考慮した穿刺を行う

患者個々のVAの特徴を患者とともに理解し、穿刺部位を決定し、同一部位の穿刺を避けること等について解説した。

4.穿刺痛に対応できる知識・情報を得る

リドカイン・プロピトカイン配合剤クリームによるQOLと穿刺部痛の改善効果についての自施設における試験結果を紹介した。結論としてクリームを使用することにより、穿刺痛、患者の穿刺に対する不安感、体の痛み、身体的健康度、腎疾患日常生活への影響、腎疾患による負担のQOLが改善し透析ケアの満足度も改善したとのことであった。VA管理にもQOLの視点は重要であり、患者には穿刺痛を緩和する薬剤の情報提供を行い、選択肢を提示し選択してもらうことが必要と述べた。

⬆司会の前波輝彦先生

⬆演者の藤本圭司先生

⬆演者の鈴木志穂先生

⬆セミナー会場風景